

<研究室活動報告>

茨城県大子町における地域と教育研究会の活動報告

柏崎賢吾*

1. 活動概要

2016年11月6日、第32回佐原地区産業文化祭が開催された。この文化祭にて筆者ら(学類生1名、大学院生6名)は、さはら小学校の児童らによる自家製野菜販売の取組み「夢道場」や地域のお母さんたちによる「ハッスルママの会」の出店する店の手伝いを行った。今回は参加学生の都合上、産業文化祭開催当日のみの参加となった。またこのときは、ちょうど「茨城県北芸術祭」の開催期間(開催期間2016年9月17日～11月20日)に重なり、芸術祭を訪れることもできた。

1-1. 佐原地区産業文化祭

佐原地区産業文化祭では、佐原地区の人々が出店を構えるほか、農作物の品評会や子どもたちによるソーラン節の発表が行われ、地域における文化・産業の振興が目的となっている。開催場所は、大子町立さはら小学校のすぐ近く、奥久慈茶の里公園であった。当日は太陽がよく顔を出し、暖かい日差しの中で行われた。筆者にとって、このような地域のお祭りに「お客さん」でなく、祭りの提供側として参加することは初めての経験であった。午



図1 佐原地区産業文化祭のようす

前中にさはら小学校を訪問し、「夢道場」で販売する野菜の出荷準備をお手伝いした後、会場の公園へと向かった。すでに収穫された農作物の品評会が行われており、公園が近付くにつれてマイクを通して聞こえてくる活気にあふれた声が、だんだんと大きくなっていった。会場に到着すると、すでに200人くらいだろうか、町の人たちが集まっていた。学生たちはそれぞれ2～3名ずつに分かれて、「夢道場」や「ハッスルママの会」の出店の手伝いに取りかかった。その後は店の手伝いをしながら、子どもたちのソーラン節や地域のサークルによるフラダンスや

* 筑波大学教育学類3年

太極拳の発表を鑑賞したり、毎年恒例となっている「スリッパ飛ばし」や「大抽選会」などのイベントに飛び込みで参加した。

1-2. 「夢道場」

「夢道場」は、さはら小学校の児童によって行われる自家製野菜販売の取組みである。「さはらファミリー会社」という会社を立ち上げ、高学年の上級生が中心的な「社員」となって活動を行う。会社には社長や生産部長、販売部長などの役職が存在し、それぞれの役職を児童たちが務める。栽培や収穫など協力しながら、実際の販売に向けて長期間にわたって準備を行う。

収穫した農作物は今回の佐原地区産業文化祭の他、夏に道の駅での販売も行っている。お祭り当日の朝、学生一行が小学校に到着すると、すでに児童たちが販売する野菜の出荷準備を行っていた。経験のある上級生を中心に、児童たちが自ら栽培し収穫した農作物を運び、洗浄、選別、袋詰めなどを行う。ひとりひとりがそれぞれの役割をてきぱきこなしており、はじめは学生の出番が無いように感じられるほどであった。学生たちはそれぞれに児童たちとのコミュニケーションを図り、何を手伝えれば良いのかを聞き出し少しずつ児童たちの中に入っていった。

産業文化祭の会場に到着すると、子どもたちは「夢道場」の割り当てられたスペースにおいて販売の準備を行なった。看板を設置し、野菜を並べ、会計の用意をした。販売が始まると、児童たちは会計や客の誘導、店の前での呼び込みなどそれぞれの役割に分かれて販売に取り組んだ。我々学生たちは主に野菜を並べる手伝いや、野菜を買いにやってきた人々の誘導の手伝いをした。

1-3. 「ハッスルママの会」

「ハッスルママの会」は、地域の元気なお母さんたちの組織する会である。今回「ハッスルママの会」では、飲み物を販売する出店を構えていた。今回の産業文化祭で筆者はこの会の店を手伝い、コーヒーの抽出を担当した。店の周りにはイスが並べられており、年配の方々がちょっと一息つきたいときに、イスを用意をするのも役割であった。

1-4. 茨城県北芸術祭

茨城県北芸術祭とは、2016年9月17日～11月20日の65日間にわたって、茨城県北地域6市町(日立市、高萩市、北茨城市、常陸太田市、常陸大宮市、大子町)を開催市町として開催された芸術祭である。正式名称は「KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭」。主催は茨城県北芸術祭実行委員会(会長 橋本 昌 茨城県知事)で、海と山の広大な自然を舞台に、「海か、山か、芸術か?」をテーマとして約100の作品を展示した。期間中の来場者数は約77万6千人(茨城県北芸術祭ホームページより)。

大子町がこの芸術祭の開催地のひとつとなっており、我々が訪問したときに芸術祭の開催期間中であったため、産業文化祭の空いた時間や帰りの途中の時間を利用して、芸術祭を鑑賞した。産業文化祭が開催されていた奥久慈茶の里公園には、和紙人形美術館が隣接しており、この美術館もまた県北芸術祭の会場のひとつとされていた。この和紙人形美術館のほか、旧初原小学校および、旧上岡小学校を訪問し、廃校を利用した美術作品の展示を鑑賞した。



図2 旧上岡小学校

2. 感想と考察

2-1. 「夢道場」での取組み

さはら小学校の「夢道場」の取組みにおいて特筆すべき特徴は、(1)「会社」をつくり異なる学年の児童たちが共に同じ目標に向かって活動を行う点と、(2)実際の販売に向けた準備期間が長期間にわたる点である。以下、その点について考察する。

(1)「会社」組織の中で児童たちは「社員」となり、特に上級生には役職が与えられる。役割分担を明確にし、同じ目標に向かって活動することで、子どもたちは責任感をもって準備に取り組むことができると考える。また、学年という単位で学校生活を送り、基本的には同じ学年の子と共に学習する子どもにとって、異なる学年で交流する貴重な機会となるだろう。なお販売が行われたときには、さはら小学校を卒業した中学生も「夢道場」に訪れており、後輩たちの姿をみて懐かしそうな表情を浮かべていた。彼らにとって「夢道場」という取組みは、小学校と中学校という境界をも越えて、その地域に生きることを感じさせる特別な活動となっていると考えた。

当日の準備や実際の販売の様子をみていると、自主的にテキパキと動く児童がいる一方で、途中で遊んでしまったり、どうしていいか分からなくなっている児童も見受けられ、ひとりの「社員」としての責任をどのように感じているのか気になる場面もあった。しかしこの取組みを継続的に行うことで、そうした児童が少しずつ変化していく様子も看取できるのだと思った。おそらく児童は活動内容を振り返るときに次回への課題を挙げ、その後の成長につなげていくのだろう。

(2)長期間にわたる準備の末、実際に自分たちで作った農作物を売る機会が、児童たちの小

学校生活において重要な意味を持つと思った。お客さんとして来てくれて、実際に農作物を買ってくれた地域の人々と交流を持つことは、児童にとって非常に貴重な体験となるだろう。地域の人々から直接「ありがとう」という言葉をかけてもらうことで、長期間にわたって準備をしてよかったと思えるのかもしれない。また、取組みが継続的に行われていることにより、子どもたちのあいだで経験が共有され、より良い活動内容を目指して児童が自主的に活動しているようすも見て取れた。

この「夢道場」の取組みをお手伝いしながら、地域の人々と児童たちとの交流の機会になっていることを実感し、さらに地域の人々がこの「夢道場」の野菜販売を楽しみにしている様子が伺えた。子どもたちにとっては自分たちの暮らす地域との繋がりを実感できる場となっているのだろう。

筆者自身の大きな課題・反省点としては、「夢道場」のお手伝いをするにあたって、児童の当日の活動にしか注目できないまま参加してしまったことが挙げられる。児童の継続的な取組みに注目し、どのような文脈の中で実現に至った活動なのかを理解した上で当日のお手伝いに参加することができれば、児童により良いアプローチ、アドバイスが出来ただろうし、子どもたちがどのような意識で活動しているのか知ることが出来たと考える。

2-2. 「ハッスルママの会」でのお手伝いを通して

先に述べたように、筆者は地域の祭りに初めて提供側として参加した。一人の客として参加する祭りとその担い手として参加する祭りとは、また違った面白さがあることを体感できた。地域の元気な女性たちとの交流の中で、我々学生たちの中には誰一人として佐原地区にゆかりのある者はいないにも関わらず、「若者」として我々の参加を歓迎して下さっていることを感じ、「若い力」が地域で求められている佐原地区の現状をうかがい知ることができた。



図3 佐原地区産業文化祭のようす

一方で、祭りの担い手は主に大人であったが、その中で子供たちが積極的に手伝いをし、一緒になって活動している姿も印象的であった。産業文化祭のような祭りでは、祭りの準備や後片付けなど、大人たちの活動を子どもたちはすぐ近くで見ることができる。この産業文化祭は、担い手の役割が少しずつ子どもたちのあいだに受け継がれているように思われた。祭りの担い手が受け継がれることは単に祭りが次世代に受け継がれるだけでなく、祭りを超えて、地域の

担い手が受け継がれていくと考えることもできるだろう。祭りの担い手のひとりとしてお手伝いしながら、地域のお祭りが果たす役割について考えることができた。

2-3. 県北芸術祭を鑑賞して

今回の訪問で実際に鑑賞する機会を得ることができた場所は、県北芸術祭の開催地のうちの一部分でしかなかったが、旧初原小学校や旧上岡小学校での展示の鑑賞を通して、廃校の利活用の実態を体感することができた。ドラマ等のロケ地としても積極的に活用されている旧上岡小学校は、明治 12 年に創立され、明治 44 年に校地が現在の場所に移された。その後、昭和 16 年に上岡国民小学校、昭和 22 年に上岡小学校となり、昭和 35 年の最盛期には総児童数 278 名となった。平成 13 年 3 月に閉校した後は、地元の方々を中心とした「上岡小跡地保存の会」が維持管理に尽力し、平成 26 年 12 月には登録有形文化財に登録された。

旧上岡小学校の建物は、日本の学校建築の設計基準が確立した明治中期以降の校舎としては古い遺構であり、建築学的にも貴重な建物である。ここで重要な

のは、古い建物として学術的に価値があることに加えて、美術作品の展示を通して実際に様々な人々が訪れることにより、その建物や空間にさらに新たな価値が産み出されていることである。学校としての役割を終えた後も、また別の方法で利活用が行われ、今も絶えず人々が訪れる場所となっている現場を、この芸術祭を通して知ることができた。



図 4 旧上岡小学校の入口

3. おわりに

今回、大子町を訪問し、佐原地区産業文化祭に参加させていただいたが、その中で筆者が忘れることのできない出来事があったので、最後に紹介したい。

「ハッスルママの会」のお店の店番をしていたときのこと、筆者の目の前に一人の高齢女性が座っていた。おそらくその方の知り合いの方なのだろう、50 代くらいの女性が彼女に話しかけた。風が強かったこともあり、その二人がどんな言葉を交わしたのかは聞き取れなかった。しかし高齢女性は笑顔で、そして涙を流されていた。彼女に話しかけた女性は微笑みながら、うんうん、と頷いて、言葉を交わしていた。高齢女性にとって悲しいことがあったのかもしれないし元気の出ない日々が続いていたのかもしれない。きっと何かその女性が掛けてくれた言葉や、その心遣いが彼女にとっては嬉しかったのだろう。

朝から夕方まで続いたお祭りの中のほんの一瞬の出来事だったが、地域の人と人のつながりの意味を感じる場面が、そこにあった。